

国立国語研究所学術情報リポジトリ

千葉県南房総市三芳地区

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003549

千葉県南房総市三芳地区*

佐々木冠
立命館大学

1. 地域の概要

本稿は千葉県南房総市^{みよし}三芳地区で話されている方言の概説である。千葉県は利根川を県境として北に茨城県と接し、江戸川を県境として西に埼玉県と東京都に接する。北から順に下総、上総、安房の三つの地方に分かれる。2021年10月29日時点の人口は、6,280,561人である。

千葉県全域に見られる方言特徴としては、経験者格助詞 =gani および与格助詞 =ge(e) (南房総市三芳方言では =gēaa) や「ノ」が現れないノダ文 (本稿では拡張コピュラ構文と呼ぶ) の述部のほか、推量の -bee/-pe が用いられることが挙げられる。これらの特徴は千葉県内だけでなく、利根川の北岸の茨城県南部でも見られるものである。そして、一部の特徴 (格助詞など) は埼玉県東南部でも確認することができる (原田 2016)。

千葉県内全域の伝統方言の継承状況を調査した研究はないが、都市化と標準語の影響により語彙・文法の両面で伝統方言を流暢に話せる人は高齢層に限定されるものと思われる。市原市内の中学生を対象に伝統方言の継承状況を調査した森田 (2020) によると伝統方言の知識の保有率は文法・音韻・語彙とも 25% から 30% の間にとどまる。ただし、文法・音韻・語彙それぞれにおいて高い保持率を示す項目があるため、伝統方言の特徴が若年層に全く受け継がれていないわけではない。

佐々木 (1997) によれば千葉県の方言は3つに区分される。安房・上総方言、下総東部方言、下総西部方言である。下総では/g/の音価が[ŋ]の地域が多く、上総と安房では[g]の地域が多い。安房・上総方言には/k/の脱落により、「書く」が[ka:]になる地域がある。

本稿で概説するのは、南房総市三芳地区の方言である。佐々木 (1997) の分類では安房・上総方言に含まれる。この地域は内陸部にあり、南房総市内の沿岸部とは異なる方言の特徴が見られる。沿岸部では、共通語の/ai/が[e:]に対応するが ([ne:]「ない」)、南房総市三芳方言では[ēa:]に対応する ([nēa:]「ない」)。

この方言では、一人称代名詞、二人称代名詞、疑問代名詞 (人) が主格・所有格の ga の前に来る際に独立性のない o- (o-ga), wa- (wa-ga), da- (da-ga) になる (樋口 2005)。

音素目録は共通語のそれと同じだが、音配列論的制限には違いがある。共通語では、外来語を除き、促音の後ろに来ることができる要素は無声阻害音だけである。一方、南房総市三芳方言で

* 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」および、JSPS 科研費 19K00636 の助成を受けたものである。本稿で用いたデータは、2014年から2021年にかけて樋口正規氏をはじめとする三芳・方言の会の皆さんに教えていただいたものである。形容詞の語形の揺れに関する部分のデータの収集に当たっては、嵯峨志読書会の皆様にもご協力いただいた。長時間調査にご協力いただいた皆様にお礼を申し上げる。本稿におけるいかなるミスも筆者の責任であることは言うまでもない。

は、促音の後ろに有声阻害音 ([oddara]「俺たち」) や /t/ ([olla]「俺たち」), 接近音 ([kikoetejjo]「聞こえているよ」) が来る場合がある。

この地域の方言の先行研究としては『ちば — 教育と文化』に掲載された樋口正規氏による一連の論考がある。また、方言による昔話の記録『方言で語る増間の昔話』が2011年に三芳・方言の会によって刊行されている。2020年にはこの昔話集の第2集が刊行されている。佐々木・グロースターズ(1984)などの言語地理学的研究で調査地点となったことはあるが、三芳地区の方言の文法を体系的に記述した先行研究は存在しない。

本稿の記述は、南房総市三芳地区で生育した1950年生まれの話者への聞き取り調査で得たデータと『方言で語る増間の昔話』(2011年に出版されたもの)に出てくるデータに基づくものである。『方言で語る増間の昔話』からの引用には「[増間]」と表記することにする。

2. 音韻論

2.1 音素目録

2.1.1 母音音素

三芳方言には /i/, /u/, /e/, /o/, /a/ の5種類の短母音音素がある。/u/の音声的実現は非円唇の[u]である。短母音の音価は東京方言のそれとほぼ同じである。短母音音素の体系と母音音素の最小対を、それぞれ、表1と表2に示す。

表1 母音体系

	前舌	後舌
狭母音	i	u
半狭母音	e	o
広母音	a	

表2 最小対

/ki/	[ki]	「木」
/ke/	[ke]	「毛」
/ka/	[ka]	「蚊」
/ko/	[ko]	「子」
/ku/	[ku]	「苦」

短母音に対応する5つの長母音 /ii, ee, aa, oo, uu/ がある。これらの中にはこの方言に特徴的な母音融合によって生じたもの (//sabu-i// → //sabii/「寒い」, //kuro-i// → //kuree/「黒い」) や /k/脱落によって(通時的に)生じたもの (tokoro > tooro「所」, cukuru > cuuru「作る」) や /k/脱落と母音融合の相互作用で生じたもの (//kak-u// → ka-u → //kaa/) が含まれる。

二重母音には、下降二重母音 /ai, oi, ui/ (ni-kai「2階」, oiněaa「いけない」, suiziN「水神」) と上昇二重母音 /ěaa/ がある。上昇二重母音 /ěaa/ は、o-měaari (< o-mair-i「お参り」) のように通時的に形態素内部の ai から生じたものや、akěaa (← //aka-i//「赤い」) のように形態素境界を含む a-i から形態音韻論的交替の結果生じたものが含まれる。

通時的には同じ分節音の環境に遡る形態素が /ai/ と /ěaa/ で最小対を成す場合がある。/hěaa/「灰」と /hai/「肺」, 類別接尾辞の /-kěaa/「回」 (/ni-kěaa/「2回」) と /-kai/「階」 (/ni-kai/「2階」) な

どである。形態素内部の/ai/と/ěaa/は音素的に対立するので共時的に一方からもう一方を導く関係にはない。

形態音韻論的プロセスで生じる/ěaa/は/jaa/と相補分布する。/ěaa/は子音が必ず前に来る。一方、/jaa/は子音が前に来ない。「咲いた」//sak-i-ta// → saita → /sěaataa/, 「開いた」//ak-i-ta// → aita → /jaataa/ (最終音節の長音化はアクセント核のない動詞で生じる現象)。/j/と異なり、/ěaa/の先頭の/ě/は先行する子音を硬口蓋化したり破擦化したりしない。/ě/は先行する子音の調音点や調音様式を変更しないために半狭化を被った/j/と見なすこともできるかもしれない。

2.1.2 子音音素

三芳方言の子音音素の一覧を表3に示す。この表にはない子音的な要素として撥音に対応する原音素/N/と促音に対応する原音素/Q/を認める。

表3 子音音素

		両唇	歯茎	軟口蓋	声門
閉鎖	無声	p	t	k	
	有声	b	d	g	
鼻音		m	n		
摩擦	無声		s		h
	有声		z		
破擦	無声		c		
はじき			r		
接近		w	j		

2.1.2.1 位置の制限

原音素/N/と/Q/は音節末尾に現れる。/N/は語末に現れるが(zibuN「自分」)、/Q/は語末に現れない。これらの原音素の音声的実現については2.1.2.3節で詳述する。

原音素/Q/が先行しない/p/は和語には現れない。原音素/Q/の後ろの位置であれば和語の形態素でも/p/が現れる(něaaQ-pe「ないだろう」)。語頭の/p/は外来語にしか現れない(paN「パン」)。漢語の場合、原音素/N/や/Q/の後で/p/が現れる(saN-pa「3波」、iQ-pěaa「いっぱい」)。

和語の語頭には/r/が現れない。

2.1.2.2 結合の制限

/t/, /d/ は、母音/e/, /o/, /a/が後続する環境には現れるが、狭母音/i/, /u/および接近音/j/, /w/が後続する環境には現れない。/w/は/a/ (wakar-u「わかる」)、/aa/ (waa「沸く」)、/ěaa/ (wěaataa「沸いた」)が後続する環境には現れるが、それ以外の環境には現れない。現在では/w/の前に子音が現れることはないが、1950年生まれの話者の祖父(1898年生まれ)は「食べられない」を/kw-aN-

něaa/のように発音していたという（1950年生まれの話者自身は/ku-e-něaa/と発音する。その父（1921年生まれ）は/k-aN-něaa/と発音していたという。世代間で合拗音の消失と可能接尾辞の置き換えが生じていることがわかる）。/j/は前舌母音（/i/, /e/）の前に現れない。

2.1.2.3 異音

/s/ は母音 /e, a, o, u/ の前で [s], 母音 /i/ および接近音 /j/ の前で [ɕ]である。[s]: /senaka/ [senaka]「背中」, /sakana/ [sakana]「魚」, /kuso/ [kuɕo]「糞」, /sune/ [suɕe]「すね」; [ɕ]: /siraga/ [ɕiraga]「白髪」, /sjuugi/ [ɕu:gi]「祝儀」。

/z/ は母音 /e, a, o, u/ の前で [z], 母音 /i/ および接近音 /j/ の前で [ʒ] である。語頭や /N/ の後では [dʒ] や [dʒ] になる。[z]: /kaze/ [kaze]「風」, /hiza/ [çiza]「膝」, /nozoku/ [nozoku]「覗く」, /mizu/ [mizu]「水」; [ʒ]: /kuzibiki/ [kuʒibiki]「くじ引き」, /azjoo/ [aʒo:]「どのように」; [dʒ]: /zeni/ [dzeni]「銭」, /zasii/ [dzaei:]「座敷」, /zoori/ [dzo:ri]「草履」; /zi/ [dʒi]「字」。

/c/ は、母音 /i/ の前で [tɕ], 母音 /u/ および /a/ の前で [tɕ] である。[tɕ]: /ci/ [tɕi]「血」, [tɕ]: /curite/ [tsurite]「吊り手」, /otoQcaN/ [ototsan]「お父さん」。

/g/は、一貫して有声軟口蓋閉鎖音[g]で実現する。[ŋ]は/N/の異音としてしか実現しない。標準語では母音間で/g/がガ行鼻濁音[ŋ]になるが、この方言では母音間でも/g/は、/macigěaa/ [mateigěa:]「間違い」に示すように鼻音性を帯びない。

/h/ は、母音 /e, a, o/ の前で [h], 母音 /i/ の前で [ç], 母音 /u/ の前で [ɸ]である。[h]: /he/ [he]「屁」, /ha/ [ha]「歯」, /ho/ [ho]「穂, 帆」; [ɸ]: /hu/ [ɸu]「麩」; [ç]: /hi/ [çi]「火」。

/Q/は後続する子音と調音点と有声性が同じ子音として実現する。後続する子音が破擦音/c/の場合は/Q/は閉鎖音/t/となる。それ以外の場合、/Q/の長音様式は後続する子音と同じである。標準語では一部の外来語を除けば、/Q/に後続する子音は清音すなわち無声阻害音に限られるが、この方言では有声阻害音や接近音/j/も後続する。/kataQpoo/ [katappo:]「片方」, /jaQto/ [jatto]「やっと」, /suQkari/ [suukkari]「すっかり」, /iQsjo/ [ieɕo]「一緒」, (//ar-u=da//→) /aQda/ [adda]「あるのだ」, /tokoQga/ [tokogga]「ところが」, (//ore-ra//→) /oQra/ [olla]「私たち」, (//ar-u=jo//→) /aQjo/ [ajjo]「あるよ」。

/N/は、後接する音節がない場合と後続する音が/s/の場合、[N]で実現する。/siNbuN/ [eimbun]「新聞」, /suiziNsama/ [suizinsama]「水神様」。/s/以外の音が後続する場合は、/N/の調音点は後続する子音と同じになる。[m]での実現については前出の「新聞」の第1音節末の/N/を参照されたい。/hoNtoo/ [honto:]「本当」, /keNka/ [kenka]「喧嘩」。

2.2 音節構造とモーラ

三芳方言の音節構造を表4に示す。表4の中での分節音は音素と原音素である。頭子音（onset）をOで、渡り音（glide）をGで、音節核（nucleus）をNで、音節末子音（coda）をCoで示す。

表4 音節構造

O	G	N	Co
p, t, k, b, d, g, s, z, c, h, r, m, n	j, w	i, e, a, o, u, ii, ee, aa, oo, uu, ai, oi, ui, ěaa	N, Q

(1)に音節構造の例を示す。音節境界を「.」で示す。下線部が該当する構造である。2.1.2.2節で述べたように、/kwa/のような音連続はかつては可能であったが、現在では/w/の前に頭子音が立つ構造は認められない。

(1) 音節構造の例

- N a.ka 「赤」, aa 「会う」, i.ki 「息」, ii 「良い」
GN ja.sii 「安い」, jaa.taa 「開いた」, wa.ta.ru 「渡る」, waa 「沸く」
ON ka 「蚊」, kaa 「買う/書く」, i.nu 「犬」, cuu.ru 「作る」
OGN hja.ku 「100」, hjoo.si 「拍子」
NCo aQ.ta 「あった」, iiQ.ta 「よかった」, aN.ga 「いいえ」
GNCo jaQ.ta 「やった」, jooQ.ta 「よかった」, jaN.bee 「やろう」, jaaN.da 「歩いた」
ONCo kaQ.ta 「買った」, cuuQ.ta 「作った」, kaN.gěaa 「考え」, kěaaN.bee 「帰ろう」
OGNCo si.cjaQ.taa.da 「してしまったのだ」, i.naa.ra.sjuuQ.te 「いないらしくて」

2.3 アクセント

表5に4モーラ名詞までのアクセントを示す。アクセント核は「J」で表すことにする。何もついていない名詞は無核名詞である。三芳方言のアクセント体系はモーラ数+1のアクセント型の区別がある点で東京方言と同様である。

表5 三芳方言の名詞のアクセント

1モーラ名詞	ha 「葉」	haJ 「歯」			
2モーラ名詞	ame 「飴」	a]me 「雨」	numa] 「沼」		
3モーラ名詞	sakana 「魚」	mo]naka 「最中」	soba]ja 「蕎麦屋」	otoo] 「男」	
4モーラ名詞	niwatori 「鶏」	ka]makiri 「蠐螬」	mura]saki 「紫」	karaka]sa 「唐傘」	otooto] 「弟」

ただし、すべての語彙のアクセントが東京方言と同じであるわけではない。mika]N (蜜柑, 標準語では mi]kaN) や u]so ~ uso] (嘘, 標準語では u]so) のように標準語より後ろの位置にアクセント核が来る例がある。標準語より後ろの位置にアクセント核が来る単語としては hota]ru 「蛭」, momi]zi 「紅葉」, hana]bi 「花火」などがある (標準語では、それぞれ, ho]taru, mo]mizi, ha]nabi)。

千葉県の方言でアクセント核が標準語より後ろにくる傾向は金田一（1942）や藤原（1972）が指摘している。この傾向を反映したものと考えられる。

アクセント核の有無が母音の長短の条件になることがある。2.1.1 節でも言及したように、過去接尾辞は無核動詞に後接する際に母音が長音化する（無核動詞「やる」*jar-u, jaQ-ta|a*）。一方、有核動詞の場合は過去接尾辞の母音が長音化しない（有核動詞「ある」*a|r-u, a|Q-ta*）。

3. 名詞の形態論

3.1 名詞の内部構造

3.1.1 単数と複数

三芳方言では双数と複数を接尾辞で区別することはない。複数であることの表示は、名詞の名詞句階層（Silverstein 1976）上の位置付けにより異なる。1 人称代名詞と非目上 2 人称代名詞に付属する複数接尾辞は *-dara* である。複数接尾辞 *-ra* は、1 人称代名詞、非目上 2 人称代名詞、目上 2 人称代名詞、3 人称代名詞、指示詞、人間・動物名詞に付属する。人間・動物名詞の場合、複数接尾辞 *-domo* によって複数を表すこともある。植物名詞やもの名詞には複数接尾辞が付属しない。

表 6 名詞句階層と複数接尾辞

1 人称	非目上 2 人称	目上 2 人称	3 人称	指示詞	人間・動物名詞	植物名詞	もの
<i>-dara</i>	<i>-dara</i>						
<i>-ra</i>	<i>-ra</i>	<i>-ra</i>	<i>-ra</i>	<i>-ra</i>	<i>-ra</i>		
					<i>-domo</i>		

複数接尾辞 *-dara* の例を(2)と(3)に示す。

- (2) *so-N sigoto=wa oN-dara=ga iQsjo-N si-bee.*
 そ-属 仕事=主題 1 人称-複=主 いっしょ-に する-意思
 「その仕事は私たちが一緒にやろう」
- (3) *so-N sigoto=wa waN-dara=ga jaN=daa=na.*
 そ-属 仕事=主題 2 人称-複=主 やる=繫=終助詞
 「その仕事はお前たちがやるんだな」

複数接尾辞 *-ra* の例を(4)と(6)に示す。また、複数接尾辞 *-domo* の例を(5)と(6)に示す。

- (4) *so-N sigoto=wa oměaa-ra=ga si-N=no=kai.*
 そ-属 仕事=主題 2人称-複=主 する-非過去=準体=疑問
 「その仕事はあなた方がするのか」
- (5) *a-N kasi=wa a-N jaN-domo=ga kuQ-ta=N=ka.*
 あ-属 菓子=主題 あ-属 男-複=主 食う-過去=準体=疑問
 あの菓子はあの男たちが食べたのか？
- (6) *a-N kasi=wa a-N {inu-domo=ga/inu-ra=ga} kuQ-ta=N=ka.*
 あ-属 菓子=主題 あ-属 犬-複=主 食う-過去=準体=疑問
 あの菓子はあの犬たちが食べたのか？

複数接尾辞 *-ra* が *re/* で終わる代名詞に付く際、*ore, ware, are* の *re* が撥音や促音になり、*oN-ra, oQ-ra, waN-ra, waQ-ra, aN-ra, aQ-ra* という形式になる。

複数接尾辞 *-ra* と *-domo* は標準語でも見られる形態素だが、*-dara* はそうではない。樋口 (2005) は *-dara* の由来について次のように推測している。すなわち、この接尾辞の *da* は「たち」に由来するものでそれ自体が複数を表していたが、複数であることの意識が薄れてさらに *ra* をつけた形式が現れたという。

3.1.2 接辞

名詞に付く接頭辞には程度が大きいことを表す *oo-* (*oo-goe* 「大声」) や美化語を形成する *o-* があるが、調査協力者によれば男性は *o-* をあまり用いない。『方言で語る増間の昔話』に出てくる *o-* の例は、*o-boo-saN* (お坊さん), *o-tera* (お寺), *o-měaari* (お参り) であり、いずれも女性のセリフに限られる。

名詞に付く接尾辞には前節で示した各種の複数接尾辞の他、尊敬を表す *-saN* などがある。

3.2 代名詞の構造と体系

3.2.1 人称代名詞の体系

三芳方言の人称代名詞の体系を表 7 に示す。この方言の 1 人称単数代名詞と非目上 2 人称代名詞には、独立形式と付属形式がある。末尾に「-」をつけた形式が独立性のない付属形式である。3.1.1 節でも述べたが、1 人称代名詞と非目上 2 人称代名詞の複数形は、独立形式と接尾辞 *-dara* によって形成される。複数形を形成する際に、独立形式はモーラ数は保つが、末尾の母音が脱落し、独立形式の末尾に促音もしくは撥音が生じる。3 人称代名詞の複数形は接尾辞に *-ra* のみを用いる点で 1 人称代名詞や非目上 2 人称代名詞と異なるが、接尾辞に先行する形式の末尾の母音が脱落し促音もしくは撥音が生じる点では 1 人称代名詞や非目上 2 人称代名詞と同様である。

表7 人称代名詞の体系

	単数		複数	
人称	目上	同等, 目下	目上	同等, 目下
1 人称	ore, o-		oQ-dara, oN-dara, oQ-ra, oN-ra	
2 人称	oměaa	ware, wa-	oměaa(-saN)-ra	waQ-dara, waN-dara, waQ-ra, waN-ra
3 人称	are		aQ-ra, aN-ra	

1 人称代名詞と非目上 2 人称代名詞で付属形式が用いられるのは、主格 (ga) , 所有格 (ga) , 与格 (gěaa) , 経験者格 (gani) である。これらの格において付属形式が用いられるのは 7 節で扱う疑問代名詞 (dare, da-) にもみられる現象である。これらの格を表す形態素は、起源的に所有格であるか所有格をその内部に含むものである。与格の「ゲ〜ゲア」については、古典語の「がり」起源説 (森下 1971) , 所有格+方位格 (=e/i) 説 (井上 1984) , 所有格+「家」説 (佐々木 2015) がある。後の 2 説をとるなら、与格も所有格を起源に含むことになる。経験者格 (gani) は、所有格 (ga) と位格 (ni) から形成されている。

対格や共格 (to) の場合、代名詞は独立形式が用いられる。代名詞がコピュラの =da の前に来る際にも独立形式が用いられる。

(11)と(19)で ore, waree という最終音節の母音が長母音になっている形式があるが、目的語が無助詞の場合、最終音節の母音が伸びる傾向がある。これは代名詞だけでなく名詞でも見られる傾向である。1 人称代名詞の単数形の独立形式は、主格、属格、共格の各種形式とコピュラの前では/re/が促音または撥音になる。また、非目上 2 人称代名詞の単数形の独立形式も、属格、共格の各種形式とコピュラの前では/re/が促音または撥音になる。

1 人称の例

- (8) *so-N sigoto=wa {o-ga/oQ=ga} jaQ=do.* (主格)
 そ-属 仕事=主題 {私-主/私=主} やる.非過去=終助詞
 「その仕事は私がするよ」
- (9) *soraa {o-ga/oQ=ga} kasi=da=do.* (所有格)
 それ.主題 {私-所/私=所} 菓子=繫.非過去=終助詞
 「それは私のお菓子だよ」
- (10) *soraa oN=no kěaa-ta zi=da=do.* (属格主語)
 それ.主題 私=属 書く-過去 字=繫.非過去=終助詞
 「それは私の書いた字だよ」
- (11) *akira=ga ore cure-te-Q-te kure-Q=do.* (対格)
 アキラ=主 私.対 つれる-中止-行く-中止 くれる.非過去=終助詞
 「アキラが私を連れて行ってくれるよ」

- (12) *so-N kasii o-gěaa kur-aQsjaa.* (与格)
 そ-属 菓子.対 私-与 くれる-命令.丁寧
 「そのお菓子を私にください」
- (13) *o-ganjaa wakaN-něaa.* (経験者格)
 私-経.主題 わかる-否定.非過去
 「私にはわからない」
- (14) *oQ=to akira=ga ig-u=do.* (共格)
 私=共 アキラ=主 行く-非過去=終助詞
 「私とアキラが行くよ」
- (15) *soraa {oN=daa=do/oQ=daa=do}.* (名詞述語)
 それ.主題 私=繋.非過去=終助詞
 「それは私だよ」

2 人称の例

- (16) *so-N sigoto=wa wa-ga {jaQ/jaN}=daa=na.* (主格)
 そ-属 仕事=主題 お前-主 やる.非過去=繋.非過去=終助詞
 「その仕事はお前がするんだね？」
- (17) *soraa wa-ga kasi=da=do.* (所有格)
 それ.主題 お前-所 菓子=繋.非過去=終助詞
 「それはお前のお菓子だよ」
- (18) *soraa waN=no kěaa-ta zi=da=do.* (属格主語)
 それ.主題 お前=属 書く-過去 字=繋.非過去=終助詞
 「それはお前の書いた字だよ」
- (19) *akira=ga waree cure-te-Q-te kure-Q=do.* (対格)
 アキラ=主 お前.対 つれる-中止-行く-中止 くれる.非過去=終助詞
 「アキラがお前を連れて行ってくれるよ」
- (20) *so-N kasii wa-gěaa kure-bee.* (与格)
 そ-属 菓子.対 お前-与 くれる-意思
 「そのお菓子をお前にあげよう」
- (21) *wa-ganjaa wakaN-něaa.* (経験者格)
 お前-経.主題 わかる-否定.非過去
 「お前にはわからない」
- (22) *waQ=to akira=ga ig-u=daa=na.* (共格)
 お前=共 アキラ=主 行く-非過去=繋.非過去=終助詞
 「お前とアキラが行くんだね？」

- (23) *soraa waN=da=jo.* (名詞述語)
 それ.主題 お前=繋.非過去=終助詞
 「それはお前だよ。」

3.2.2 指示詞の体系

三芳方言の指示詞の体系を表 8 に示す。近称、中称、遠称、不定称の指示表現は、それぞれ、*ko-*、*so-*、*a-*、*do-* を語根として形成されるが、連体・様態表現と連用表現では不定称で母音始まりの語根 *azi-* を含む表現が用いられる点が特徴的である。母音始まりの語根 *azi-* は 7 節で示す疑問詞でも用いられる要素である。

表 8 指示詞の体系

	近称 <i>ko-</i>	中称 <i>so-</i>	遠称 <i>a-</i>	不定称 <i>do-</i>
場所	<i>koo</i>	<i>soo</i>	<i>asoo</i>	<i>doo</i>
方向	<i>koQ-ci</i>	<i>soQ-ci</i>	<i>aQ-ci</i>	<i>doQ-ci</i>
物	<i>kore</i>	<i>sore</i>	<i>are</i>	<i>dore</i>
連体・指示 (～の)	<i>ko-N</i>	<i>so-N</i>	<i>a-N</i>	<i>do-N</i>
連体・様態 (～のような)	<i>koo juu</i>	<i>soo juu</i>	<i>aa juu</i>	<i>doo juu/azjoo-na</i>
連用 (～のように)	<i>koo huu=N</i>	<i>soo huu=N</i>	<i>aa huu=N</i>	<i>azi /doo huuN</i>

場所表現の例を(24)と(25)に示す。(24)の具格は出来事の場所を表す用法である。(25)の *=N* は位格助詞 *=ni* の縮約形である。

- (24) *{koo/soo/asoo}=de magaN-bee.*
 {ここ/そこ/あそこ}=具 曲がる-意思
 「{ここ/そこ/あそこ}で曲がろう」
- (25) *doo=N ii basjo=ga aN=da=kai.*
 どこ=位 良い.非過去 場所=主 ある.非過去=繋=疑問
 「どこに良い場所があるのか」

3.3 数詞の体系と構造

数量表現は「数詞＋類別接尾辞」の構造を持つ。数詞には和語系のものと漢語系のものがある。表 9 に個数と人数を表す表現を示す。和語系数数詞と漢語系数数詞の行は数を数えるときの言い方である。和語系数数詞による人数は数量が 4 までである。漢語系数数詞による人数は 3 以上の数量で用いられる。3 人と 4 人には和語系と漢語系の言い方が共存しているが、和語系は使われなくなりつつある。基本的に類別接尾辞 *-ko* と *-niN* は漢語系数数詞を語幹に選択するが、数量が 4 の場合は

和語系の jo-, joQ- をとる。また, -ko は数量が 7 の場合も sici でなく nana を語幹としてとる。一方, -niN は数量が 7 の場合漢語系の sici を語幹としてとる。

表 9 数詞+類別接尾辞の例

	1	2	3	4	5
和語系数数詞	hii	huu	mii	joo	icu
個数	hito-cu	huta-cu	miQ-cu	joQ-cu	icu-cu
人数	hito-ri	huta-ri	mita-ri	joQta-ri	
漢語系数数詞	ici	ni(i)	saN	si(i)	go(i)
個数	iQ-ko	ni-ko	saN-ko	joN-ko	go-ko
人数			saN-niN	jo-niN	go-niN
	6	7	8	9	10
和語系数数詞	muu	naa	jaa	koo	too
個数	muQ-cu	nana-cu	jaQ-cu	kokono-cu	too
人数					
漢語系数数詞	roku	sici	haci	kjuu, kuu	zjuu
個数	roQ-ko	nana-ko	haci-ko, haQ-ko	kjuu-ko	zjuQ-ko
人数	roku-niN	sici-niN	haci-niN	ku-niN, kjuu-niN	zjuu-niN

類別接尾辞には歩数を表す -ho, 回数を表す -kēaa (-kai とも), 動物の個体数を表す -hii (標準語の「匹」に対応) などがある。これらの類別接尾辞は漢語系数数詞を語幹としてとる。対を表す類別接尾辞 -kumi は数量が 2 までは和語系数数詞を語幹としてとる。

3.4 格の種類と機能

三芳方言の格形式の一覧を表 10 に示す。1 人称代名詞と非目上 2 人称代名詞の主格, 所有格, 与格, 経験者格で代名詞が付属形式になることについては 3.2.1 節で述べた。主格 (ga), 所有格 (ga), 与格 (gēaa), 経験者格 (gani) および属格 (no) には助詞としての用法のほかに接尾辞としての用法があることになる。

表 10 三芳方言の格形式

格	形式	Cf. 標準語
主格	代名詞-ga (o-ga), 名詞=ga (isusu=ga)	俺が, 石臼が
対格	名詞-: ([isusu:])	石臼を
経験者格	代名詞-gani (wa-gani), 名詞=gani (taroo=gani)	お前に, 太郎に
与格	代名詞-gěaa (o-gěaa), 名詞=(N)gěaa (otooto=(N)gěaa)	俺に, 弟に
位格	名詞=ni, =N (soo=N (i-ru))	そこに (いる)
向格	名詞=sa, =e (tookjoo={sa/e})	東京に (~へ)
具格	名詞=de (mizu=de (araa))	水で (洗う)
奪格	名詞=kaN (masuma=kaN)	増間から
共格	名詞=to (otooto=to)	弟と
所有格	代名詞-ga (o-ga), 名詞=ga (ojazi=ga (sjasiN))	俺の, 親父の
属格	指示詞-no (a-no), 名詞=no (taroo=no)	あの, 太郎の
連体場所格	名詞=na (sita=na (ta))	下の (田圃)

主語は名詞句の有生性に関わりなく主格の (ga) でマークされる。直接目的語には助詞が付属しないが、短母音で終わる名詞の場合は語末の短母音が長音化する。

標準語の「に」の使用領域で経験者格 (gani), 与格 (gěaa), 位格 (ni) が使い分けられている点は千葉県以外の地域と茨城県南部と埼玉県東南部に共通する特徴である。この地域では、斜格経験者 (以下の(26)を参照) と間接目的語 (以下の(27)を参照) が形式的に区別されている。経験者格は、状態述語文の経験者をマークするために用いられる。与格は間接目的語をマークする形式である。経験者専用の格は類型論的にも珍しい。他にはアンディ語やゴドベリ語といったダゲスタン南西部 (コーカサス) の言語に見られる情動格がある (Malchukov 2009)。なお、三芳方言の与格助詞は普通名詞に付属する際に名詞と助詞の間に撥音があらわれることがある。

- (26) *wa-ganjaa o-ga kimoci=ga wakaN-něaa.*
 お前-経.主題 私-所 気持ち=主 わかる-否定.非過去
 「お前には俺の気持ちがわからない」
- (27) *taroo=wa otooto=(N)gěaa zibuN=no ucii jaQ-taa.*
 太郎=主題 弟=与 自分=属 家.対 やる-過去
 「太郎は弟に家をやった」

対格は、(27)の *ucii* 「家」のように直接目的語を表すほか、(28)に示すように通路を表すこともある。この点は標準語の「を」でマークされた名詞句と並行的である。

- (28) *taroo=wa micii aruQ-te-ru.*
 太郎=主題 道.対 歩く-中止.いる-非過去
 「太郎は道を歩いている」

三芳方言の対格名詞句が標準語の「を」格名詞句と異なるのは、直接目的語と通路を表す対格名詞句が一つの節に共存できる点である。(29)の例文は『方言で語る増間の昔話』収録の「若布んミチ引き」からの引用である(訳の()内は著者が補った)。直接目的語である「わかめ」には標準語的な格助詞 *=o* がついている。「ひっばる」行為の通路である「道」は、この方言の通常の対格名詞句と同様、最終音節の母音が長母音になっている。この例文の「」内の標準語訳は座りの悪いものを感じられるのは、二重ヲ格制約(Double-o constraint, Harada 1973; Shibatani 1973)によるものと考えられる。母語話者が編纂した昔話集に(29)の例文があることから、この方言では同一節内で対格名詞句の重複が可能な場合があることがわかる。対格名詞句が重複する構造は、4.3.1 節に示すように、使役文にも見られる。

- (29) *wakame=o zuruzuru micii hiQpar-i-nagara*
 わかめ=対 ずるずる 道.対 ひっばる-連用-ながら
jaab-i-dasi-ta=da=jo. [増間]
 歩く-連用-出す-過去=繋.非過去=終助詞
 「若布をズルズル道を引っぱりながら歩き出した(のだよ)」

位格は場所を表すほか受動文の動作主も表す。*/ni/*がそのまま実現するのは撥音が先行する場合で、それ以外の場合は縮約形である*/N/*になる傾向がある。(30)では母音終わりの「紙」に後接する位格助詞が撥音になっているのに対して、撥音で終わる「坊さん」に後接する位格助詞は *=ni* のままである。

- (30) *kami=N cucuN-de boosaN=ni watasi-taa=Qte.* [増間]
 紙=位 包む-中止 坊さん=位 渡す-過去=引用
 「紙に包んで坊さんに渡した」

向格は標準語の「へ」と同様方向・行き先を表す。

- (31) *taroo=wa tookjoo=sa dekake-taa.*
 太郎=主題 東京=向 出かける-過去
 「太郎は東京に出かけた」

具格，奪格，共格の機能は標準語と同様である。なお，(32)に示すように，標準語の「から」に対応する要素は奪格の場合だけでなく，接続助詞の場合も/kaN/になる。

- (32) *masuma=kaN nago=made=wa kudarizaka=ga jokee=daa=kaN...* [増間]
増間=奪 那古=限=主題 下り坂=主 多い=繋.非過去=原因
「増間から那古までは下り坂がたくさんあるので ...」

標準語では連体修飾格は「の」だけであるが，この方言には所有格 (ga)，属格 (no)，連体場所格 (na) の3種類の連体修飾格形式が存在する。これも千葉県全域と茨城県南部と埼玉県東南部に共通する特徴である。所有格は名詞句階層上親族名称より代名詞よりの所有者をマークする((33)参照)。連体場所格は，(34)のように名詞句内の意味関係が相対的な位置を表す際に用いられる。それ以外の連体修飾名詞は属格助詞でマークされる。(35)の =N は属格の =no の縮約形である。

- (33) *ojazi=ga sjasiN* (父親の写真)
(34) *sita=na ta* (下にある田んぼ)
(35) *taroo=N sjasiN* (太郎の写真)

これまでに言及しなかった各格形式の機能は以下の通りである。主格は文の主語および状態述語文の直接目的語(意味役割は対象)を表す。(36)の心理述語文では経験者である「太郎」が経験者格でマークされ，「私の気持ち」という対象が主格でマークされている。

- (36) *taroo=ganjaa o-ga kimoci=ga wakaN-něaa.*
太郎=経.主題 私-所 気持ち=主 わかる-否定.非過去
「太郎には私の気持ちがわからない」

4. 動詞の形態論

4.1 屈折形態論

動詞で文が終止する際の動詞の構造は表 11 に示す通りである。表 11 に示した接尾辞のうち屈折的なものは時制とムードに関するものである。

表 11 動詞の構造と屈折接辞の承接順序

接尾辞	ヴォイス	アスペクト	極性	時制	ムード
動詞語幹	使役 -(s)ase			非過去 -(r)u, -i	禁止 -na
	受動 -(r)are	継続 -te (i)-	否定 -na, -naaQ	過去 -ta(a)	命令 -e, -ro
	可能 -e, -rare			回想過去 -taQta	意思/推量 -pe, -bee

非過去接尾辞 -(r)u は極性が肯定のときに用いられる。極性が否定の場合に用いられる非過去接尾辞は -i である。非過去接尾辞 -i は否定接尾辞 -na に後接し、否定接尾辞末の/a/と融合し、[nēaa]となる。過去接尾辞 -ta は極性が肯定のときは、学校文法でいうところの連用形に後接し、動詞の基本語幹（語根と同形）が/s/以外の子音で終わる場合は 4.2 節で詳述する音便が生じる。この方言の連用形は、カ変動詞が語幹末母音が/i/に交替した形式 (ki) , サ変動詞と母音語幹動詞が基本語幹と同じ形式 (si, mi) , 子音語幹動詞が基本語幹に接尾辞 -i が後接した形式になっている。極性が否定の場合、否定接尾辞の異形態 -naaQ に過去接尾辞 -ta が後接する。回想過去の -taQta に前接する要素は過去接尾辞 -ta のそれと同じである。

表 11 で丸括弧に入れて示した子音/s, r/は連結子音（清瀬 1971）である。これらの連結子音は接尾辞が母音語幹動詞と変格活用動詞に後接する際に母音連続を回避するかたちで現れる。ただし、子音語幹動詞の語根末の/k/または/w/が脱落する際には連結子音が現れず、母音融合（「書く」//kak-u//→kau→kaa, 「買う」//kaw-u//→kau→kaa）が生じたり母音連続（「書けば」//kak-eba//→kaeba）が出現する。

(37)と(38)に示すように連体修飾節の述部には回想過去以外の時制接尾辞が現れる。(39)に示すように回想過去接尾辞は連体修飾節の述部に現れることができない。連体修飾節の述部に現れることがない点で回想過去接尾辞はムードの接尾辞と同様である。

- (37) [koNna koto=N naQ-to tokuni cikaraa ire-ta-gar-u]
 こんな こと=繋.連用 なる.非過去-継起 特に 力.対 入れる-願望-動詞化-非過去
 otoo=daQ-ta. [増間]
 男=繋-過去
 「こんなことになるのと特に力を入れたがる男だった」
- (38) [mukasi hutaN=de iQ-taa maci]
 昔 2人=具 行く-過去 祭り
 「昔2人で行った祭り」
- (39) *mukasi hutaN=de iQ-taQta maci
 昔 2人=具 行く-回想過去 祭り

直説法の場合、時制接尾辞の後に接尾辞は付かない。命令接尾辞は動詞の基本語幹に後接する。命令接尾辞の異形態 *-ro* は母音語幹動詞とサ変動詞に後接し、命令接尾辞の異形態 *-e* は子音語幹動詞に後接する。カ変動詞の命令形は基本語幹の語幹末母音を長音化した *koo* である。母音語幹動詞「くれる」は基本語幹 *kure-* がそのままの形式で命令形になる点で例外的である。禁止の *-na* は非過去形に後接する。非過去形が */ru/* で終わる場合、*/ru/* が撥音になる。意思/推量接尾辞は極性が否定の場合と肯定の場合で前接する要素が次のようになっている。肯定では、子音語幹動詞の場合、非過去形に後接するが、母音語幹動詞とサ変動詞の場合、基本語幹に後接する。カ変動詞の場合、*ku-* という形式の語幹に後接する。否定に後接するのは、推量の用法で、接尾辞 *-pe* に前接するのは否定接尾辞の異形態 *-naaQ* になる。

三芳方言の動詞には、子音語幹動詞、母音語幹動詞、サ変動詞、カ変動詞の4種類の動詞がある。語形変化に関しては、サ変動詞は中古語の連用形に由来する形式 *si-* がほとんどの接尾辞のホストとなっており、一段化が進んでいる方言と見なすことができる。これは金田一（1942）も指摘するように千葉県の方言に共通の特徴である。サ変動詞で一段化が及んでいないのは使役と受動という派生形態法だけであり、これらの語形では *si-* ではなく *s-* が語幹として用いられている。態形態法でも可能 (*si-rare*) では語幹として *si-* が用いられる。表 12 に屈折のパラダイムを示す。

表 12 動詞の屈折形態法

		子音語幹	母音語幹	サ変	カ変
		「書く」	「見る」	「する」	「来る」
文 終 止	断定非過去	<i>kaa</i>	<i>mi-ru</i>	<i>si-ru</i>	<i>ku-ru</i>
	断定過去	<i>kěaa-ta</i>	<i>mi-ta</i>	<i>si-ta</i>	<i>ki-ta</i>
	命令	<i>ka-e</i>	<i>mi-ro</i>	<i>si-ro</i>	<i>koo</i>
	禁止	<i>kaa-na</i>	<i>mi-N-na</i>	<i>si-N-na</i>	<i>ku-N-na</i>
	意志	<i>kaa-bee</i>	<i>mi-bee</i>	<i>si-bee</i>	<i>ku-bee</i>
	推量	<i>kaa-bee,</i> <i>kaa=daQ-pe</i>	<i>mi-bee,</i> <i>mi-Q=daQ-pe,</i> <i>mi-N=daQ-pe</i>	<i>si-bee,</i> <i>si-Q=daQ-pe,</i> <i>si-N=daQ-pe,</i>	<i>ku-bee,</i> <i>ku-Q=daQ-pe,</i> <i>ku-N=daQ-pe</i>
	否定推量	<i>kaa-něaaQ-pe</i>	<i>mi-něaaQ-pe</i>	<i>si-něaaQ-pe</i>	<i>ko-něaaQ-pe</i>
	否定非過去	<i>kaa-něaa</i>	<i>mi-něaa</i>	<i>si-něaa</i>	<i>ko-něaa</i>
	否定過去	<i>kaa-něaaQ-ta</i>	<i>mi-něaaQ-ta</i>	<i>si-něaaQ-ta</i>	<i>ko-něaaQ-ta</i>
接 続	中止	<i>kěaa-te</i>	<i>mi-te</i>	<i>si-te</i>	<i>ki-te</i>
	仮定	<i>ka-eba</i>	<i>mi-reba</i>	<i>si-reba</i>	<i>ku-reba</i>
	継起	<i>kaa-to,</i> <i>kěaa-tara</i>	<i>mi-Q-to,</i> <i>mi-tara</i>	<i>si-Q-to,</i> <i>si-tara</i>	<i>ku-Q-to,</i> <i>ki-tara</i>

/k/語幹動詞の語幹末の/k/脱落は生産的なプロセスであり、表 12 で「書く」の命令形や仮定形が *ka-e*, *ka-eba* であるのは/k/脱落の結果である。語幹末の/k/の存在は命令接尾辞として *-ro* ではなく *-e* が選択されることから推察される。この点で、語幹末の/k/は/w/と同様である。ただし、脱落が生じない場合がある点で、語幹末の/k/と/w/は異なる。ぞんざいさのない命令表現 (4.3.3 節参照) *kak-ai* (あるいは *kak-ěaa*) の場合、語幹末の/k/脱落は生じない。

推量形は意志形と同形が用いられる他、(43)に示す拡張コピュラ形式 (5.3 節参照) に *-pe* が後接した形式が用いられる。

(43) *hagas-u=daQ-pe*. (剥がすのだろう)

剥がす-非過去=繋-推量

過去推量を表す場合は、*si-taQ-pe*「しただろう」のように断定・連体過去形に *-pe* が接続する。この場合、過去接尾辞は異形態 *-taQ* をとる。

4.2 子音語幹動詞音便形

/s/で基本語幹が終わる動詞以外の子音語幹動詞は、*-te*および語源的に*-te*を含む接尾辞が後接するときに音便が生じる。語源的に*-te*を含む接尾辞は変格活用動詞を含むすべての動詞で連用形を語幹として選択し、子音語幹動詞では語幹末が/s/の場合以外、語幹末の母音/i/もしくは語根末の子音の削除を通して音便語幹が形成される。音便語幹が形成される形態音韻論的プロセスの詳細については佐々木 (2021) を参照されたい。ここでは、音便の種類とその結果生じる音形を紹介するにとどめる。表 13 に子音語幹動詞の非過去形と過去形を示す。

表 13 子音語幹動詞の非過去形と過去形

語幹末子音	意味	非過去形	過去形
k	書く	<i>kaa</i>	<i>kěaa-ta</i>
g	繋ぐ	<i>cunag-u</i>	<i>cuněaa-daa</i>
s	出す	<i>das-u</i>	<i>dasi-ta</i>
n	死ぬ	<i>sin-u</i>	<i>siN-daa</i>
m	飲む	<i>nom-u</i>	<i>noN-da</i>
b	飛ぶ	<i>tob-u</i>	<i>toN-daa</i>
t	立つ	<i>tac-u</i>	<i>taQ-ta</i>
r	切る	<i>kir-u</i>	<i>kiQ-ta</i>
w	買う	<i>kaa</i>	<i>kaQ-taa</i>

語幹末子音が/t, r, w/の場合、促音便が生じる（語幹末子音/w/は丁寧な命令表現 kaw-ai（あるいは kaw-ěaa）以外では出現しない）。語幹末子音が/n, m, b/の場合、撥音便が生じるとともに接尾辞の先頭の子音を有声化する。これらの音便は連用形語幹末の/i/の削除の結果生じた音配列論的に認められない子音連続を解消するために生じた現象と考えられる。

語根の末尾が軟口蓋子音/k, g/の場合、語根末の子音が脱落し、語幹末に/...a-i/が生じ、これが母音融合により/...ěaa/になる。形態素境界を含む/...a-i/が/...ěaa/になる現象は5節で扱う形容詞でも見られる現象である。/...ěaa/はイ音便と母音融合の結果である。

なお、形態音韻論的プロセスで生じたすべての/...a-i/が母音融合を被るわけではない。「書く」の願望形は連用形に願望接尾辞が後接する形態的構成になっているが、この場合、連用形最終音節頭子音の/k/が脱落しても母音融合は生じない（//kak-i-ta-i//→kaitěaa）。語源的に/-te/を含む接尾辞が後接する場合とそれ以外の場合で母音融合の生起に関して非対称性があるわけだが、その要因は二つ考えられる。音便による/k/脱落が音節数の削減に動機付けられている一方でそれ以外の場合は音節数の変化が要求されないことが要因である可能性と/k/脱落が生じるレベルの違いが要因である可能性である。

この方言の軟口蓋子音で終わる子音語幹動詞はイ音便が母音融合の条件を供給する関係になっているため、表面上音便で生じた/i/が現れないことがある点が特徴になっているが、他にも特徴的な語形変化をする場合があるので、ここでそれについて述べておきたい。

/k/語幹動詞については「書く」/kak-/を例に解説を行なった。「書く」の語幹末子音の直前の母音は/a/であった。他の母音が/k/に先行する場合は、「書く」の場合とは異なる変化が現れる。「聞く」と「引く」は語根末の/k/の前に/i/がある。これらの動詞でも音便形と連用形で母音の音価が異なるがその在り方は「書く」の場合とは異なる。「聞く」の語形変化の一部を示す。非過去形：//kik-u//→[kju:]、過去形：//kik-i-ta//→[ki:ta]、命令形：//kik-e//→[kjuē]、否定形：//kik-na-i//→[kjuaněa:]、連用形「聞き返した」//kik-i-kaes-i-ta//→[kjuikěa:ejta]。「引く」の語形変化の一部を示す。非過去形：//hik-u//→[φu:]、過去形：//hik-i-ta//→[φi:ta]、命令形：//hik-e//→[φuē]、否定形：//hik-na-i//→[φuaněa:]、連用形：//hik-i//→[φui]。基底表示に/u/が含まれない語形（例えば命令形/kik-e/[kjuē]）で[u]が現れているのは、/k/の低音調性 (grave) の残存と分析できる可能性がある (Jakobson et al. 1951) によれば低音調性を持つ子音は唇音と軟口蓋音であり、低音調性を持つ母音は後舌母音である。低音調性は、スペクトルの下側が優勢である音響特徴である。スペクトルの上側が優勢である高音調性 (acute) と対立する。「引く」の先頭の子音が[φ]で実現することについても同様の分析ができる可能性がある。

語根末の子音が軟口蓋音であるにもかかわらず例外的にイ音便が生じない動詞がある。「行く」ig-である。この動詞は非過去形 ig-u、否定形 iga-něaa、可能形 ig-e-ru からわかるように語根末子音が/g/であるが、語源的に/-te/を含む接尾辞が後接するときは促音で終わる形式になる（例：過去形 iQ-ta）。

4.3 派生形態論

4.3.1 ヴォイス

接尾辞で派生するヴォイスには、使役、受動、可能、願望がある。四つのヴォイスに関する形式はいずれも動詞の基本語幹と接尾辞という形態的構成になっている。使役形は、基本語幹に *-(s)ase* を後接するかたちで形成される。受動形は基本語幹に *-(r)are* を後接するかたちで形成される。表 14 に示すように、サ変動詞の使役形と受動形の語幹は基本語幹の異形態 *s-* を用いる。可能形は基本語幹に *{-e, -rare}* が後接する。可能接尾辞の異形態 *-e* は子音語幹動詞に後接し、*-rare* はそれ以外の動詞に後接する。サ変動詞の可能形は語幹として *s-* ではなく *si-* を用い、接尾辞として *-rare* が後接する。標準語では補充法により *deki-ru* がサ変動詞の可能形となっている。補充法ではなく接尾辞の付加でサ変動詞の可能形が形成される点はこの方言の特徴の一つと言える。なお、子音語幹動詞に後接する可能接尾辞として *-are* を用いる話者もいる。このような話者にとっては可能形と受動形は同形になり、可能と受動は構文レベルで区別されることになる。願望形は動詞の連用形に願望接尾辞 *-ta* が後接する構造になっている。表 14 では各語形の非過去形を示す。「書く」の語幹末子音が現れないのは母音間における */k/* 脱落の結果である。「願望」の行に現れる *-tëaa* は願望接尾辞 *-ta* と形容詞型活用をする要素に付属する非過去接尾辞 *-i* が融合した形式である。

表 14 接尾辞付加によるヴォイス

	子音語幹動詞	母音語幹動詞	サ変動詞	カ変動詞
使役	ka-ase-ru	mi-sase-ru	s-ase-ru	ko-sase-ru
受動	ka-are-ru	mi-rare-ru	s-are-ru	ko-rare-ru
可能	ka-e-ru, ka-are-ru	mi-rare-ru	si-rare-ru	ko-rare-ru
願望	ka-i-tëaa	mi-tëaa	si-tëaa	ki-tëaa

表 14 に示した四つのヴォイス形式を述部とする構文は次のような特徴を示す。

使役文の動作主（被使役者）の格形式は使役接尾辞が後接する動詞の他動性と被使役者の意思の有無によって決まる。他動詞に使役接尾辞が後接して形成された使役文では被使役者は(44)に示すように位格または与格になる。一方、自動詞文に使役接尾辞が後接して形成された使役文の場合、(45)に示すように被使役者がその行為を望んでいない強制使役の場合は被使役者が対格になり、(46)に示すように被使役者が行為を望んでいる許可使役の場合は被使役者が対格または与格になる。

- (44) *taroo=wa ootoo={N/Ngëaa} hoN jom-ase-ta.*
 太郎=主題 弟={位/与} 本.対 読む-使役-過去
 「太郎は弟に本を読ませた」

- (45) *otooto=wa ig-i-taa-něaa=Qcjuu=keN*
 弟=主題 行く-連用-願望.連用-否定.非過去=補文化辞.言う.非過去=逆接
otooto ig-ase-taa.
 弟.対 行く-使役-過去
 「弟は行きたくないというが、弟を行かせた。」
- (46) *otooto=wa ig-i-těaa=Qcjuu=kaN*
 弟=主題 行く-連用-願望.非過去=補文化辞.言う.非過去=原因
{otooto/otooto=Ngěaa} ig-ase-taa.
 {弟.対/弟=与} 行く-使役-過去
 「弟は行きたいというので、弟に行かせた」

被使役者の格形式が対格であるか与格であるかが動詞の他動性によって決まる点は標準語と同様である。一方、この方言には標準語への逐語訳が困難な使役文も存在する。(47)では、被使役者である「弟」だけでなく通路を表す「吊り橋」も対格である。3.4節で述べたようにこのような構造は標準語では二重ヲ格制約で排除されるものとされてきたものである。(47)を直訳した「」内の標準語の文は座りが悪い文である。

- (47) *oQkaN-gar-u otooto curibasii aruk-ase-ta.*
 怖い-動詞化-非過去 弟.対 吊り橋.対 歩く-使役-過去
 「怖がる弟を吊り橋を歩かせた」 (直訳, 標準語では許容量が低い)

この方言でどのような範囲で二重対格構造が成立可能であるのかは今後の調査によって明らかにして行かなければならないが、3.4節の(29)と上に示した(47)には共通点があることは指摘できる。この方言の被使役者の統語特徴については更なる調査が必要だが、他の方言(例えば水海道方言(佐々木 2004))と同様に目的語としての統語特性を持っているとすると、二つの二重対格構文は、目的語である対格名詞句と通路という副詞的な要素である対格名詞句を持つ点で共通する。

Kuryłowicz (1949)は、主格以外の全ての格に一次的機能と二次的機能があり、対格のような文法格では目的語であることを示す統語的用法が一次的機能であり、通路のような副詞的要素を示す用法が二次的機能であるとした。この方言では、機能の重複が生じない範囲で対格という形式の重複が許されるものと考えられる。(29)と(47)の二重対格構文では対格名詞句の機能の重複が生じていない。一方、他動詞文をもとにした使役文で被使役者が対格になることがないのは、対格の一次的機能の重複を避けたためと考えられる。

受動文には直接受動文と所有受動文と間接受動文の3種類がある。直接受動文は(48)–(51)に示す構文で、主語が能動文の内項(対象や受け手、能動文では直接目的語や間接目的語となる)に対応する。(48)のような行為動詞の動作主は位格助詞でマークされ、奪格助詞でマークされるこ

とはない。一方、(49)–(51)に示すように対象の移動を表す動詞や感情動詞や情報伝達の動詞の外項（動作主および経験者）は位格助詞だけでなく奪格助詞によってもマークされる。なお、(51)は使役受動文であり、使役者である「先生」が斜格に降格した構造になっている。

- (48) *taroo=wa seNsee=N nagur-are-ta.*
 太郎=主題 先生=位 殴る-受動-過去
 「太郎は先生に殴られた」
- (49) *taroo=wa seNsee={N/kaN} sirjoo watas-are-ta.*
 太郎=主題 先生={位/奪} 資料.対 渡す-受動-過去
 「太郎は先生から資料を渡された」
- (50) *taroo=wa miNna={N/kaN} suk-are-te-ru.*
 太郎=主題 みんな={位/奪} 好く-受動-中止.いる-非過去
 「太郎はみんなから好かれている」
- (51) *taroo=wa so-N sirasee seNsee={N/kaN} kjuw-as-are-taa.*
 太郎=主題 そ-属 知らせ.対 先生={位/奪} 聞く-使役-受動-過去
 「太郎はその知らせを先生に聞かされた」

所有受動文は動詞の内項の所有者が主語になる構文である。(52)に示すように動作主は位格で表され、奪格にはならない。また、(52)で対格（この場合長音化が対格であることを示している）になっている内項は主格助詞でマークすることができない。

- (52) *taroo=wa daQka=N asii hum-are-taa.*
 太郎=主題 誰か=位 足.対 踏む-受動-過去
 「太郎は誰かに足を踏まれた」

間接受動文は動詞が選択する要素以外のものが主語になる構文で迷惑のニュアンスを帯びる。(53)で省略されている主語は話者と解釈される。自動詞「座る」は動作主をとる動詞である。「座る」の動作主は位格助詞でマークされている。

- (53) *sekii toQ-te-taa=keN sira-něaa hito=N suwar-are-taa.*
 席.対 とる-中止.いる-過去=逆接 知る-否定.非過去 人=位 座る-受動-過去
 「席をとっていたが、知らない人に座られた」

上に示した受動文は全て主語が有情物であった。無情物が主語になる受動文は(54)のように動作主が明示されない。動作主を明示する場合は、(55)に示すように能動文にする傾向がある。

- (54) *ko-N hoN=wa eego=de ka-are-te-ru.*
 こ-属 本=主題 英語=具 書く-受動-中止.いる-非過去
 「この本は英語で書かれている」
- (55) *ko-N hoN=wa nacume sooseki=ga kěaa-ta.*
 こ-属 本=主題 夏目漱石=主 書く-過去
 「この本は夏目漱石が書いた」

この方言の受動文のもう一つの特徴は、尊敬表現の用法がないことである。(56)の訳文から明らかのように、標準語では自発・受動形を尊敬表現に用いる場合がある。一方、この方言では同じ内容を動詞に尊敬接尾辞を付加した述部を持つ文で表す。

- (56) *teNnooheeka=ga sakee nom-aQsjaQ-ta.*
 天皇陛下=主 酒.対 飲む-尊敬-過去
 「天皇陛下がお酒を飲まれた」

可能文は、(57)に示すように能力の持ち主が経験者格助詞でマークされる。一方、内項は語末の長音化により対格であることを示す場合と主格助詞にマークされる場合がある。

- (57) *o-gani=mo zjoozu=N {zii/zi=ga} ka-e-Q=do.*
 私-経=も 上手=繫.連用 {字.対/字=主} 書く-可能-非過去=終助詞
 「私も上手に字が書けるぞ」

標準語では文の格フレームに関する制約 (Surface Case Canon (Shibatani 1977)は主格名詞句を一つも含まない文や複数の対格名詞句を含む文を排除する制約) により自動詞から派生した可能文の能力の持ち主を斜格で表せないことが指摘されているが、この方言では、(58)に示すように自動詞から派生した可能文でも能力の持ち主を経験者格助詞でマークすることができる。

- (58) *karada=ga jowěaa=kaN o-ganjaa ig-e-něaa.*
 体=主 弱い.非過去=原因 私-経.主題 行く-可能-否定.非過去
 「体が弱いので、私は行けない」

願望文は、(59)に示すように、能動文と同じ格フレームの構造と内項が主格助詞でマークされる二重主格構造の二つの構造が可能である。内項が主格助詞でマークされる際には強調され内項の指示物が他のものと対比されると解釈される。

- (59) *oraa ima {mizuu/mizu=ga} nom-i-těaa.*
 私.主題 今 {水.対/水=主} 飲む-連用-願望.非過去
 「私は今水 {を/が} 飲みたい」

複数の動詞を使った複合述語による迂言的な態には、中止形と「もらう」を使った受益構文とこの受益構文に願望の *-ta* を後接した希求構文がある。

(60)に示すように、動詞の中止形と「もらう」を後続させた述部を持つ受益構文では、動作主が位格で表され、主語は動作主の行為によって利益を被る人と解釈される。この受益構文は、動作主が位格助詞でマークされる点と動詞が選択しない要素が主語になる点で間接受動文と共通する特徴を持っているが、主語が迷惑を被る人と解釈されるか利益を受ける人と解釈されるかでは対照的である。

- (60) *taroo=wa ojazi-saN=ni hoN kaQ-te moraQ-taa.*
 太郎=主題 父親-さん=位 本.対 買う-中止 もらう-過去
 「太郎はお父さんに本を買ってもらった」

標準語では希求構文の述部は動詞の中止形に「ほしい」が後接するが、この方言では先述の受益構文の述部に願望の接尾辞 *-ta* が付いた構造になる。補文の主語は位格助詞でマークされる場合と主格助詞でマークされる場合がある。他の指示物と対照される場合に主格助詞が用いられる。

- (61) *a-N hito={N/ga} ki-te mora-i-těaa.*
 あ-属 人={位/主} 来る.連用-中止 もらう-連用-願望.非過去
 「あの人 {に/が} 来てほしい」

この方言にも動詞の中止形とヤル／クレルを組み合わせる受益者を与格名詞句で示す構文がある。動詞の中止形とヤルを述部に持つ例文(62)は、遠心的な受益関係を表し、「孫」は聞き手の孫と解釈される。一方、動詞の中止形とクレルを述部に持つ(63)は、求心的な受益関係を表し、「孫」は話し手の孫と解釈される。

- (62) *magō=Ngěaa hoN joN-de jar-ai.*
 孫=与 本 読む-副動 やる-命令.丁寧
 「孫に本を読んでやれ。」(遠心的, 孫は聞き手の孫)

- (63) *magō=Ngěaa hoN joN-de kur-ai.*
 孫=与 本 読む-副動 くれる-命令.丁寧
 「孫に本を読んでくれ。」(求心的, 孫は話者の孫)

上の受益構文に見られるように、補助動詞用法のヤルとクレルは遠心と求心で意味的に対立し、用法に重なりが見られない。一方、本動詞として用いられる際にはヤルとクレルに意味的な重なりがある。ヤルには、(64)に示す遠心の用法しかないが、クレルには(65)に示す遠心と(66)に示す求心の用法がある。

- (64) *mago=Ngěaa hoN jaQ-taa.*
 孫=与 本 やる-過去
 「孫に本をやった」(遠心)
- (65) *mago=N hoN kure-taa.*
 孫=位 本 くれる-過去
 「孫に本をやった」(遠心)
- (66) *mago=ga hoN kure-taa.*
 孫=主格 本 くれる-過去
 「孫が本をくれた」(求心)

この方言の本動詞として用いられる授与動詞の体系は日高(2007:114)の授与動詞中間体系(IVa)に相当する。この方言の授与動詞は、日高(2007)が指摘する本動詞用法よりも補助動詞用法で授与動詞の人称的方向性の区別が明確になる傾向を反映している。

4.3.2 アスペクト

中止形と存在動詞(i-)を組み合わせて継続形を作る点でこの方言は標準語と同様である。存在動詞(i-)は、通常、(67)に示すように、先行する副動詞接尾辞と融合しているが、(68)に示すように、副助詞を副動詞接尾辞につける際には顕在化する。

- (67) *ame=ga huQ-te-ru.*
 雨=主 降る-中止.いる-非過去
 「雨が降っている」
- (68) *ame=ga huQ-te=wa i-taa=keN...*
 雨=主 降る-中止=主題 いる-過去=逆接
 「雨が降ってはいたが...」

継続形は進行相と結果相の両方を表す。(69)は進行相の例で、(70)は結果相の例である。

- (69) *kodomo=ga arii-te-ru.*
 子供=主 歩く-中止.いる-非過去
 「子供が歩いている」

- (70) *ki=ga taore-te-ru.*
 木=主 倒れる-中止.いる-非過去
 「木が倒れている」

継続形は、(71)に示すように経験を表すためにも用いられる。

- (71) *hawai=sa=wa haa zjuuneN-měaa=N iQ-te-ru.*
 ハワイ=向=主題 もう 10年-前=位 行く-中止.いる-非過去
 「ハワイにはもう10年前に行っている」

将然相を表す表現は意思動詞と無意思動詞で異なる。意思動詞の場合、(72)のように意思接尾辞 *-bee* に補文化辞と発言動詞が融合した形式を続けてその語末を継続形にした表現を述部とする。一方、無意思動詞の場合、(73)のように連用形に *-soo=da* を後接する形式を述部とする。

- (72) *oQkasaN=ga karee cuuN-bee=QcjuQ-te-ru.*
 お母さん=主 カレー.対 作る.非過去-意思=補文化辞.言う-中止.いる-非過去
 「お母さんがカレーを作ろうとしている」

- (73) *ki=ga taore-soo=da.*
 木=主 倒れる.連用-そう=繋.非過去
 「木が倒れそうだ」

4.3.3 待遇

尊敬語は子音語幹動詞の場合は基本語幹に接尾辞 *-aQsjar* を後接した形式である (nom-aQsjar-u 「お飲みになる」)。変格活用動詞を含む母音語幹動詞は、連用形に *-saQsjar* を後接して尊敬語を作る (mi-saQsjar-u 「ご覧になる」, ki-saQsjar-u 「お出でになる」, si-saQsjar-u 「なさる」)。この方言には標準語でよく見られる補充法的な尊敬語 (前の文の標準語訳を参照されたい) はほとんど見られない。確認できている補充法的な尊敬語は存在動詞の尊敬語 *oideNnar-u* だけである。それ以外は、(74)に示すように、一貫して接尾辞 *-(s)aQsjar* によって尊敬語を形成する。

- (74) *seNsee=wa siNbuN jom-aQsjaQ-ta.*
 先生=主題 新聞.対 読む-尊敬-過去
 「先生は新聞をお読みになった」

命令文は、(75)から(78)に向かって丁寧さが高まる。(75)の命令接尾辞 *-e* (母音語幹動詞の場合 *-ro*) による命令形はぞんざいな命令とされる。(76)の接尾辞 *-ai* による命令形はぞんざいさのない普通の命令である。母音語幹動詞の場合は連用形を語幹に異形態 *-sai* が後接する。それより

丁寧なのが、(77)である。(78)の中止形に授受動詞の丁寧な命令形を後接した表現が最も丁寧である。

- (75) *oi, guzuguzu si-něaa-de hajaa nom-e.*
 おい ぐずぐず する-否定.非過去-中止 早い.連用 飲む-命令
 「おい、ぐずぐずしないで早く飲め」
- (76) *ko-N sakee nom-ai=jo.*
 こ-属 酒.対 飲む-命令.丁寧
 「この酒を飲みなさいよ」
- (77) *ko-N sakee nom-aQsjaa=jo.*
 こ-属 酒.対 飲む-命令.丁寧=終助詞
 「この酒を飲んでくださいよ」
- (78) *ocjaa ire-taa=kaN noN-de kur-aQsjaa=ne.*
 お茶.対 淹れる-過去=原因 飲む-中止 くれる-命令.丁寧=終助詞
 「お茶を淹れたので飲んでくださいね」

丁寧表現は標準語と同様で連用形と接尾辞 *-mas* の組み合わせである。

- (79) *oraa ima=kaN siNbuN jom-i-mas-u.*
 私.主題 今=奪 新聞.対 読む-連用-丁寧-非過去
 「私は今から新聞を読みます」

丁寧表現の否定は標準語のように連用形に *-maseN* を後接する構造ではなく、動詞の否定形に *-des-u* を後接する構造 (*joma-něaa-des-u*) をとる。否定接尾辞は形容詞と同じ活用をする要素であり、*joma-něaa-des-u* 「読みません」は形容詞の丁寧形の構造を反映した形式である。5.4 節に示すように形容詞の丁寧形は形容詞に *-des-u* を後接した構造をとる。

4.4 存在動詞

有情物の存在を表すのに *i-ru* を用い、それ以外の存在を表すのに *ar-u* を使う点は標準語と同様である。両者の否定は、それぞれ、*i-něaa, něaa* である。*i-ru* の否定形が語幹と接尾辞で構成されるのに対し、*ar-u* の否定形は補充法的である。存在動詞の尊敬語は *oideNnar-u* である。

5. 形容詞・コピュラ形態論

5.1 基本構造

動詞以外の述語の屈折形式と派生形式を表 15 に示す。形容名詞は学校文法の形容動詞に対応する。

表 15 形容詞，形容名詞，名詞述語の屈折・派生形式

		赤い	静か (だ)	学生 (だ)
終止類	断定非過去	akěaa	sizuka=da	gakusee=da
	断定過去	ak(ě)aaQ-ta	sizuka=daQ-ta	gakusee=daQ-ta
	推量	ak(ě)aaQ-pe	sizuka=daQ-pe	gakusee=daQ-pe
	否定推量	akaa=n(ě)aaQ-pe	sizuka=de=n(ě)aaQ-pe	gakusee=de=n(ě)aaQ-pe
接続類	連体非過去	akěaa	sizuka=na	gakusee=no, gakusee=N
	連体過去	ak(ě)aaQ-ta	sizuka=daQ-ta	gakusee=daQ-ta
	中止	ak(ě)aaQ-te	sizuka=de	gakusee=de
	仮定	akěaa-ba, ak(ě)aaQ-tara	sizuka=dara, sizuka=nara	gakusee=dara, gakusee=nara
派生類	否定	akaa=něaa	sizuka=de=něaa	gakusee=de=něaa
	連用	akaa (nar-u)	sizuka=N (nar-u)	gakusee=N (nar-u)

標準語との差異が比較的小さい形容名詞と名詞述語について解説する。形容名詞と名詞述語の断定非過去と連体非過去が形式的に異なる点は標準語と同様である。形容名詞と名詞述語が全ての方言で断定非過去と連体非過去が形式的に区別されているわけではない。宇和島方言のように断定非過去と連体非過去がともに *geNki=na* になっている方言や青森県内で話されている諸方言のように両方とも *geNki=da* になっている方言もある。形容名詞と名詞述語の断定非過去と連体非過去が形式的に異なることは多くの方言で見られる特徴ではあるが、5.3 節で扱う拡張コピュラ構文（標準語のノダ文に相当）を考える上で重要な特徴である。

形容名詞と名詞述語の語形が標準語と異なるのは推量形と仮定形である。推量形では中古語の「べし」と同源の接尾辞 *-pe* がコピュラの異形態 *=daQ* に後接する。否定推量形も形容名詞や名詞の否定形に *=daQ-pe* が後接する形式になる。否定推量の *-mai*（あるいはその変異形）は用いられない。仮定形には標準語と同様の形容名詞や名詞に *=nara* がついた形式も用いられるが、形容名詞や名詞に *=dara* がついた形式も用いられる。

形容詞に関しては、連用形が標準語のように語幹に接尾辞 *-ku* ではなく接尾辞 *-u* が後接するかたちで形成される点、連用形や非過去形で母音融合が生じる点、語幹を拡張するために *-kar* や *-kere* が用いられない点が特徴的である。非過去形・過去形とも断定と連体が同形である点は標準語と同様である。

非過去形における母音融合は語幹末母音の種類によって生じる音形が異なる。「赤い」のように語幹末が/a/で終わる場合は、//aka-i//→akěaa/のように上昇二重母音が生じる。語幹末が/o/の場合は、「黒い」//koro-i//→kuree/のように長母音/ee/が生じる。語幹末が/u/と/i/の場合は「寒い」//sabu-i//→sabitii/、「寂しい」//sabisi-i//→sabisii/のように長母音/ii/が生じる。

連用形における母音融合も語幹末母音の種類によって生じる音形が異なる。語幹末が/a/と/o/の場合は、「赤く」//aka-u//→/akoo/, 「黒く」//kuro-u//→/kuroo/のように長母音/oo/が生じる。語幹末が/u/の場合は、「寒く」//sabu-u//→/sabuu/のように長母音/uu/が生じる。語幹末が/i/の場合は、「寂しい」//sabisi-u//→/sabisjuu/のように接近音/j/を伴った長母音/uu/を含む/juu/が生じる。なお、「良い」の非過去形と連用形は、それぞれ/ii/, /joo/であり、両者に共通の語幹を設定して接尾辞付加と母音融合によって導くのが困難である。

標準語では過去形や仮定形で -kar や -kere といった語幹を拡張する要素が用いられる (//aka-kar-ta//→/akakaQta/, //aka-kere-ba//→/akakereba/) がこの方言では用いられない。この方言の仮定形は非過去形に仮定接尾辞-ba を後接した形式である。過去形, 推量形, 中止形, -tara を用いる仮定形 (以下, 仮定形 2) では, 基本語幹より 2 モーラ長い語幹が用いられているとともに語幹最終音節の母音の音価に揺れがある点が特徴的である (表 15 に示した断定過去形 akaaQ-ta と akĕaaQ-ta は, ともに語幹部分 (akaaQ- と akĕaaQ-) が 4 モーラあり, 基本語幹 aka- より 2 モーラ長い)。表 16 に語幹末母音ごとにこれらの語形と非過去形と連用形の音形を示す。表 15 と異なり, 表 16 では語形の揺れを丸括弧を使わず, 語形を併記するかたちで示す。非過去形と連用形については語幹末母音と接尾辞 (非過去の -i, 連用の -u) の間で母音融合が生じた形式を示す。

表 16 語幹末母音の種類ごとに見た形容詞語形の揺れ

	暗い kura-	黒い kuro-	寒い sabu-	寂しい sabisi-
非過去形	kurĕaa	kuree	sabii	sabisii
推量形	kurĕaaQ-pe, kuraaQ-pe	kureeQ-pe, kurooQ-pe	sabiiQ-pe, sabuuQ-pe	sabisiiQ-pe, sabisjuuQ-pe
過去形	kurĕaaQ-ta, kuraaQ-ta	kureeQ-ta, kurooQ-ta	sabiiQ-ta, sabuuQ-ta	sabisiiQ-ta, sabisjuuQ-ta
仮定形 2	kurĕaaQ-tara, kuraaQ-tara	kureeQ-tara, kurooQ-tara	sabiiQ-tara, sabuuQ-tara	sabisiiQ-tara, sabisjuuQ-tara
中止形	kurĕaaQ-te, kuraaQ-te	kureeQ-te, kurooQ-te	sabiiQ-te, sabuuQ-te	sabisiiQ-te, sabisjuuQ-te
連用形	kuraa	kuroo	sabuu	sabisjuu

表 16 からわかるように非過去形と連用形は音価に揺れない。一方, 推量形, 過去形, 仮定形 2, 中止形の最終音節の母音の音価は, 非過去形の音価と連用形の音価の間で揺れている。母音の音価の揺れはこれらの形式の文法的な性質から生じている可能性がある。表 16 の形式を機能 (文終止か接続か, 有標の文終止か否か) と形態的構成の観点から分類すると表 17 のようになる。

表 17 形容詞語形の機能と形態的構成

文終止			接続		
	有標				
非過去形	推量形	過去形	仮定形 2	中止形	連用形
基本語幹-i	拡張語幹-pe	拡張語幹-ta	拡張語幹-tara	拡張語幹-te	基本語幹-u
		中止形 (V-te) 関連語形			

推量形、過去形、仮定形 2、中止形の語幹が形容詞語幹に分節音の素性が不完全指定された二つのモーラが加わった拡張語幹 (/基本語幹 $\mu\mu$ -/, 「 μ 」は素性が不完全指定されたモーラとする) と接尾辞で構成されるものとする、語形の揺れは次のように分析できる。

拡張語幹末のモーラは、後続する接尾辞の先頭の子音に完全同化され促音となる。これは拡張語幹が歴史的に /基本語幹-kar/ の韻律構造を継承しているためである。拡張語幹の後ろから 2 番目のモーラの音価は、語形の中の文法的なネットワークに規定される。

過去形、仮定形 2、中止形は接尾辞が語源的に -te を含む形式である。中止形は標準語のそれ (akakute または akakuQte) がそうであるように歴史的には連用形に -te が後接する形態的構成になっていた。

この歴史的な形態的構成を反映したかたちで最終音節の母音の音価が決定されると過去形、仮定形 2、中止形の語幹末母音の音価は連用形 of 最終音節の母音と同じになる。推量形にも語幹の最終音節の母音の音価が連用形 of 最終音節の母音と同じ形式があるのは、有標の文終止である点で共通する過去形からの影響と考えることができる。非過去形 of 最終音節の音価が連用形 of 最終音節の音価と同じにならないのは、推量形、過去形、仮定形 2、中止形と異なり、基本語幹と非過去接尾辞 (/i/) という分節音の素性が指定された形態素で構成されているためと考えられる。

推量形、過去形 of 最終音節の母音が非過去形 of 最終音節の母音と同じになる形式があるのは、文終止の形式の間で母音の音価を揃えるかたちの水平化の結果と考えられる。仮定形 2 と中止形にも語幹末母音の音価が非過去形 of 最終音節の母音の音価と同じ形式が存在するのは、-te と関連する接尾辞を含む点で語源的に関連する過去形からの影響と考えられる。そして、連用形 of 最終音節の母音の音価が非過去形 of それと同じにならないのは、非過去形の場合と同じで、分節音の素性が指定された形態素で構成されているためと考えられる (連用形を構成する形態素は形容詞の基本語幹と連用形接尾辞/-u/である)。

5.2 品詞上の位置づけ

形容詞、形容名詞、名詞は命令法、意思法、禁止法を持たない点で動詞と異なる。形容詞は語幹と接尾辞の組み合わせにより時制を表す点で動詞に近いが、ヴォイスやアスペクトの接尾辞が後接しない点で動詞とは異なる。形容名詞と名詞は時制を表す際にコピュラを必要とする点で動詞や形容詞と異なる。

形容名詞と名詞は述部になるときにコンピュータを含む点で共通するが、連体非過去形が異なる。形容名詞の場合、連体非過去形は形容名詞に =na が後接するが、名詞述語の場合、 =no あるいはその縮約形である =N が後接する。

以上の形態的な相違から、動詞、形容詞、形容名詞、名詞を異なる品詞と見なすことができる。

5.3 拡張コンピュータ構文

拡張コンピュータ構文は標準語のノダ文に相当する構文である。日本語の方言は拡張コンピュータ構文の述部に準体助詞が現れる方言と準体助詞が現れない方言がある。標準語を含む多くの方言は前者のタイプである。Onishi (2012)によれば、後者のタイプの方言は中部地方、山陰地方と関東地方の一部に分布する。三芳方言も後者のタイプである。

三芳方言の拡張コンピュータ文述部では、述語に直接コンピュータが後接する。(80)に非過去形にコンピュータが後接する構造を示す。筆者は連結子音/r/は基底に存在する要素ではなく母音連続回避のために挿入されるものと分析する立場だが、便宜上形態音素表示に非過去接尾辞の先頭の r を示す。四角で囲った [r] は挿入要素である。

(80) 非過去形にコンピュータが後接する拡張コンピュータ構文述部

子音語幹動詞：「買うのだ」//kak-u=da//→/kaada/, 「あるのだ」//ar-u=da//→/aQda, aNda/

母音語幹動詞：「見るのだ」//mi-[r]u=da//→/miQda, miNda/

カ変動詞：「来るのだ」//ku-[r]u=da//→/kuQda, kuNda/

サ変動詞：「するのだ」//si-[r]u=da//→/siQda, siNda/

形容詞：「赤いのだ」//aka-i=da//→/akēaada//

形容名詞：「しずかなのだ」//sizuka=da=da//→/sizukadaada/

名詞述語：「がくせいなのだ」//gakusee=da=da//→/gakuseedaada/

/r/が挿入要素であるか否かに関わらず、/ru/で終わる語形にコンピュータが後接する際に/ru/は促音または撥音になる。このプロセスがあるため、この方言では促音に濁音が後続する構造が生産的に生じる。

形容名詞と名詞述語は断定非過去形にコンピュータが後接する。また、拡張コンピュータ構文述部では、(81)–(83)に示すように、断定非過去形の末尾のコンピュータは述部が形容名詞と名詞の場合、それらが有核であるか否かに関わらず、長音化する。以下、関与的な構造でだけアクセント核を「*]*」で示す。

(81) *si]zuka=daa=da* (静かなのだ) , *siNpēaa=daa=da* (心配なのだ)

(82) *koNdaa o-ga ba]N=daa=da.*

今度.主題 私-主 番=繫.非過去=繫.非過去

「今度は私の番なのだ」

- (83) *soojuu sjuukaN=daa=da.*
 そういう 習慣=繋.非過去=繋.非過去
 「そういう習慣なのだ」

なお、この長音化の条件は 2.1.1 節と 2.3 節で述べたものと同じである。有核の「できる」と無核の「する」を含む拡張コピュラ構文(84)と(85)を対照してほしい。動詞の過去形にコピュラが後接する構造では無核の動詞の場合にだけ過去接尾辞/*-ta/*の母音が長音化している。

- (84) *kuu koto=ga de]ki-ta=da.* [増間]
 食う.非過去 こと=主 できる-過去=繋.非過去
 「食べることができたのだ」

- (85) *dekake-ru koto=N si-taa=da.* [増間]
 出かける-非過去 こと=繋.連用 する-過去=繋.非過去
 「出かけることにしたのだ」

拡張コピュラ構文の用法は標準語と重なる部分が多いが、7 節で見るように以下のような疑問詞疑問文の述部になる点が特徴的である。

- (86) *da-ga sake nom-u=da.*
 誰-主 酒.対 飲む-非過去=繋.非過去
 「誰が酒を飲むのか」

5.4 丁寧

形容詞の丁寧体は、(87)に示すように、非過去形に丁寧体のコピュラ *=des-u* をつけた形式であり、標準語と同様である。

- (87) *kjoo=wa sabii=des-u.*
 今日=主題 寒い.非過去=繋.丁寧-非過去
 「今日は寒いです」

6. 連体詞, 副詞, 感動詞

連体詞には指示詞系の *ko-N*「この」、*so-N*「その」、*a-N*「あの」、*do-N*「どの」や指示詞にコピュラの連体形を重複させた形式を付加した *koNnanaa*「こんな」、*soNnanaa*「そんな」のほか、*oNnazi*「同じ」などがある。標準語の「大きな」は *deQkěaa* という通常の形容詞と同じ語形変化をする語彙で表される。標準語にはない形式の副詞としては *haa*（「もう」に相当, (71)参照）,

gara (非意図的であることを表す, (116)参照) などがある。特徴的な感動詞としては、否定の「いや」に対応する aNga がある。

- (88) *aNga ki-taa=da=to* *omoQ-taa=kaN*
 いや 来る-過去=繋.非過去=補文化辞 思う-過去=原因
aizu si-taa=da=jo.
 合図 する-過去=繋.非過去=終助詞
 「いや、来たのだと思ったから合図したのだよ」

7. 疑問詞

三芳方言には表 18 に示す疑問詞がある。このうち人に関する疑問詞には、da- という付属形式があり、接尾辞用法の主格 (-ga), 所有格 (-ga), 与格 (-gëaa), 経験者格 (-gani) が後接する。

表 18 疑問詞

人	もの	場所	選択 (人・もの)	時間	様式・様態	数 (一般)	数 (金額)	理由
daa, daQ, daN	ani, aN	doo	doN, doQ	icu	doojuu, azi, azjoo	juucu	juura	aN=de

以下に疑問詞を含む文の例を示す。述部に疑問詞がある文と時間を問う文と数量を問う文の一部以外の疑問詞疑問文が拡張コピュラ構文になっていることがわかる。

- (89) *so-N sigoto=wa da-ga jaQ=daa.* (人, 主格)
 そ-属 しごと=主題 誰-主 やる.非過去=繋.非過去
 「その仕事は誰がするの？」
- (90) *koraa daa=da.* (人, 述語名詞)
 これ.主題 誰=繋.非過去
 「これは誰なの？」
- (91) *aN=ga hosii=da.* (もの, 主格)
 何=主 ほしい.非過去=繋.非過去
 「何が欲しいの？」
- (92) *koraa aN=da.* (もの, 述語名詞)
 これ.主題 何=繋.非過去
 「これは何なの？」

- (93) *koo=wa doo=da.* (場所, 述語名詞)
 ここ=主題 どこ=繋.非過去
 「ここはどこなの？」
- (94) *koraa da-ga kasi=da.* (人, 所有格)
 これ.主題 誰-所 菓子=繋.非過去
 「これは誰のお菓子なの？」
- (95) *koraa aN=no=tame=N jaQ=daa=jo.* (もの, 目的)
 これ.主題 何=属=ため=位 やる.非過去=繋.非過去=終助詞
 「これは何のためにやるの？」
- (96) *ko-N naka=de doN=ni aQ-ta=da.* (選択, 人)
 こ-属 中=具 どれ=位 会う-過去=繋.非過去
 「この中で, どいつに会ったの？」
- (97) *ko-N naka=de doQ=ga icibaN hosii=da.* (選択, もの)
 こ-属 中=具 どれ=主 一番 ほしい.非過去=繋.非過去
 「この中で, どれが一番欲しいの？」
- (98) *{doo juu/azjoo=na} uci=N sum-i-těaa=da.* (様態)
 どのような 家=位 住む-連用-願望.非過去=繋.非過去
 「どんな家に住みたいのか？」
- (99) *so-N zi=wa {aN=te/doohuuN} jom-u=da.* (様態)
 そ-属 字=主題 どのように 読む-非過去=繋.非過去
 「その字はどう読むの？」
- (100) *doo={e/sa} ig-eba ii=da.* (場所)
 どこ=向 行く-仮定 良い.非過去=繋.非過去
 「どこに行けばいいの？」
- (101) *icu a-e-Q=ka.* (時間)
 いつ 会う-可能-非過去=疑問
 「いつ会えるの？」
- (102) *a-N hito=wa sacumaimoo juucu kure-taa(=kai).* (数, 一般)
 あ-属 人=主題 さつまいも.対 いくつ くれる-過去 (=疑問)
 「あの人はサツマイモをいくつくれたの？」
- (103) *so-N sacumaimo=wa juura{=da/si-Q=da}.* (数, 金額)
 そ-属 さつまいも=主題 いくら{=繋.非過去/する-非過去=繋.非過去}
 「そのサツマイモはいくらするの？」
- (104) *aN=de soo=N taQ-te-Q=daa.* (理由)
 何=具 そこ=位 立つ-中止.いる-非過去=繋.非過去
 「なぜそこに立っているの？」

疑問詞疑問文が拡張コピュラ構文になるかどうかは述部の品詞に左右される。(105)–(108)に示すように述部の品詞が動詞と形容詞の場合は疑問詞疑問文が拡張コピュラ構文になる。

- (105) *iQsjoobiN=ga aQ=keN, da-ga sakee nom-u=da(=kai).*
 一升瓶=主 ある.非過去=逆接 誰-主 酒.対 飲む-非過去=繋.非過去(=疑問)
 「一升瓶があるけど、誰が酒を飲むの？」
- (106) *akibiN=ga aQ=keN, da-ga sakee noN-da=da(=kai).*
 空き瓶=主 ある.非過去=逆接 誰-主 酒.対 飲む-過去=繋.非過去(=疑問)
 「空き瓶があるけど、誰が酒を飲んだの？」
- (107) *seNsee=N naka=de da-ga icibaN oQkaněaa=da.*
 先生=属 中=具 誰-主 一番 怖い.非過去=繋.非過去
 「先生の中で誰が一番怖いの？」
- (108) *seNsee=N naka=de da-ga icibaN oQkanaaQ-ta=da.*
 先生=属 中=具 誰-主 一番 怖い-過去=繋.非過去
 「先生の中で誰が一番怖かったの？」

一方、疑問詞疑問文の述部が形容動詞や名詞述語の場合、(109)–(110)に示すように、過去形では拡張コピュラ構文であることが随意的である。

- (109) *dookjuusee=N naka=de da-ga icibaN geNki=daQ-ta(=da)(=kai).* (形容動詞)
 同級生=属 中=具 誰-主 一番 元気=繋-過去(=繋.非過去)(=疑問)
 「同級生の中で誰が一番元気だったの？」
- (110) *ko-N mura=de isja=N naQ-ta hito=ga i-taa=Qte*
 こ-属 村=具 医者=繋.連用 なる-過去 人=主 いる-過去=引用
kii-taa=keN, da-ga isja=daQ-ta(=da/kai). (名詞述語)
 聞く-過去=逆接 誰-主 医者=繋-過去(=繋.非過去/疑問)
 「この村で医者になった人がいると聞いたけど、誰が医者だったの？」

そして、疑問詞疑問文の述部が形容動詞や名詞述語で非過去時制の場合、(111)–(112)に示すように、拡張コピュラ構文にはならない。

- (111) *dookjuusee=N naka=de da-ga icibaN geNki=da(=kai).* (形容動詞)
 同級生=属 中=具 誰-主 一番 元気=繋.非過去(=繋.非過去)(=疑問)
 「同級生の中で誰が一番元気なの？」

- (112) *isja=N naQ-ta hito=ga i-ru=Qte kii-taa=keN, da-ga*
 医者=繋.連用 なる-過去 人=主 いる-非過去=引用 聞く-過去=逆接 誰-主
isja=daa(=kai). (名詞述語)
 医者=繋.非過去(=疑問)
 「医者になった人がいると聞いたけど、誰が医者なの？」

この方言では、形容動詞と名詞述語を述部とする真偽疑問文が非過去時制の場合、(113)–(114)に示すようにコピュラが全く用いられず、形容名詞や名詞に直接疑問助詞 =kai が公設する構造になる。このような構造に比べると、コピュラが現れる分、(111)や(112)は拡張コピュラ構文に近い構造に見えるかもしれない。

- (113) *oměaa=N ojazi-saN=wa geNki=kai*. (形容動詞, 非過去)
 君=属 親父-さん=主題 元気=疑問
 「君のお父さんは元気？」

- (114) *tomodaci=kara kii-taa=da=keN, oměaa=N ojazi-saN=wa*
 友達=奪 聞く-過去=繋.非過去=逆接 君=属 親父-さん=主題
isja=kai. (名詞述語, 非過去)
 医者=疑問
 「友達から聞いたんだけど、君のお父さんは医者なの？」

しかし、5.3 節で示したように形容動詞と名詞述語の拡張コピュラ構文述部の形式はコピュラが2つ連続した構造であるため、(111)と(112)の述部は、拡張コピュラ構文の述部と同一視することができない。

8. とりたて助詞

この方言のとりたて助詞には =wa (主題), =mo (も), =demo, =deN (でも), =sěaa (さえ), =baari, =baasi (ばかり) などがある。これらのとりたて助詞の機能は、標準語の対応物と同様と考えられる。願望文の内項が対格(名詞最終母音の長音化)ではなく =ga でマークされる場合や希求構文の動作主が位格助詞ではなく =ga でマークされる場合に対照焦点の読みがあることを4.3.1 節で示した。これは主格のとりたて的用法と考えることができるかもしれない。

9. 文末詞

9.1 接続助詞

副詞節を導く要素としては、仮定を表す接尾辞 -(r)eba, -ba (形容詞に付く)のほか、原因を表す助詞 =kaN, 逆接を表す助詞 =keN, =noN がある。

- (115) *ni-kěaa=mo deQkěaa oto=ga si-taa=kaN sjuziN=mo ziiQto*
 2-回=も 大きい.非過去 音=主 する-過去=原因 主人=も じっと
si-te-raN-naa naQ-te ... [増間]
 する-中止.いる-可能-否定.連用 なる-中止 ...
 「2回も大きな音がしたから、主人もじっとしていられなくなって……」
- (116) *tome-rare-taa=keN, gara sakee noN-zjaQ-ta.*
 止める-受動-過去=逆接 うっかり 酒.対 飲む-完了-過去
 「止められていたが、つい酒を飲んでしまった」
- (117) *sake=ga nom-i-těaa=noN koQpu=ga naaQ-te*
 酒=主 飲む-連用-願望.非過去=逆接 コップ=主 ない-中止
nom-e-něaa.
 飲む-可能-否定.非過去
 「酒が飲みたいのに、コップがなくて飲めない」

補文を導く補文化辞には、思考動詞や発言動詞の補文を導く =to のほか、間接疑問節を導く =gaN がある。

- (118) *oměaa=N kaNgěaa=wa macigaQ-te-ru=to omoo.*
 あなた=属 考え=主題 間違っ-中止.いる-非過去=補文化辞 思う.非過去
 「あなたの考えは間違っていると思う」
- (119) *oraa ojazi=ga anii nom-u=gaN sira-něaa.*
 私.主題 父親=主 何.対 飲む-非過去=補文化辞 知る-否定.非過去
 「私は父が何を飲むか知らない」

標準語では「か」という主節の疑問終助詞と同じ形式で間接疑問節を導くが、この方言では主節の疑問終助詞と間接疑問節を導く助詞が異なっている。

(119)で埋め込まれた疑問文は動詞が述部の疑問詞疑問文である。このような疑問詞疑問文が主節に現れる際には、7節に示したように拡張コピュラ構文になるが、(119)の間接疑問節の場合は拡張コピュラ構文の構造をとらない。以下に、動詞、形容詞、形容動詞、名詞述語が述部の疑問詞疑問文が間接疑問節になっている例を示す。形容動詞と名詞述語の場合に主節の場合と同様コピュラが用いられている。

- (120) *oraa ojazi=ga anii nom-u=gaN sira-něaa. (動詞)*
 私.主題 親父=主 何.対 飲む-非過去=補文化辞 知る-否定.非過去
 「私は親父が何を飲むか知らない」

- (121) *aN=ga jasi=gaN sira-něaa.* (形容詞)
 何=主 安い.非過去=補文化辞 知る-否定.非過去
 「何が安いか知らない」
- (122) *a-N hito=ga ani=ga kirěaa=daa=gaN sira-něaa.* (形容動詞)
 あ-属 人=主 何=主 嫌い=繋.非過去=補文化辞 知る-否定.非過去
 「あの人が何が嫌いか知らない」
- (123) *da-ga bjooki=daa=gaN sira-něaa.* (名詞述語)
 誰-主 病気=繋.非過去=補文化辞 知る-否定.非過去
 「誰が病気か知らない」

9.2 終助詞

この方言の終助詞には、疑問を表す =kai、質問を表す =ka のほか、話者の心的態度を表す =jo, =na, =ne, =ja, =dee, =sa, =do などがある。=jo と =na は文末以外に格助詞のついた名詞句や中止形に付属することがある。心的態度を表す終助詞の機能の詳細については今後明らかにしたい。以下に、例を示す。

- (124) *kikoe-te-Q=jo.* [増間]
 聞こえる-中止.いる-非過去=終助詞
 「聞こえているよ」
- (125) *ii kakii sooQto kusa=N ue=e otos-u=kaN=na.* [増間]
 良い.非過去 柿.対 そうっと 草=属 上=向 落とす-非過去=原因=終助詞
 「良い柿を草の上に落とすからな」
- (126) *koo=N nee-saN=wa sugee aikjoo=ga ii=nee.* [増間]
 ここ=属 お姉さん=主題 とても 愛嬌=主 良い.非過去=終助詞
 「このお姉さんはとても愛嬌がいいね」
- (127) *kakii nusum-ii ig-u-bee=ja.* [増間]
 柿.対 盗む-連用.目的 行く-非過去-意思=終助詞
 「柿を盗みに行こうや」 [増間]
- (128) *inu=ga ni-hii=mo saN-bii=mo soree omosiro-soo=ni*
 犬=主 2-匹=も 3-匹=も それ.対 面白-そう=繋.連用
oQkae-te sakaN=ni hoe-ta=da=dee. [増間]
 追いかける-中止 盛ん=繋.連用 吠える-過去=繋.非過去=終助詞
 「犬が二匹も三匹もそれを面白そうに追いかけて、盛んに吠えたてた」

- (129) *kodomo=ga mata kaQ-te ki-jaQsjaa=Qte*
 子供=主 また 買う-中止 来る.連用-命令.丁寧=引用
juQ-taa=da=Qte=sa. [増間]
 言う-過去=繫.非過去=引用=終助詞
 「子どもが、「また買ってきてね。」と言ったということだ」
- (130) *koNnanaa teNki=da=kaN zeQtěaa ame=ga huQ=do.* [増間]
 こんな 天気=繫.非過去=原因 絶対 雨=主 降る.非過去=終助詞
 「こんな天気だから絶対雨が降るぞ」

略号一覧

位 = 位格；共 = 共格；具 = 具格；繫 = 繫辞；経 = 経験者格；限 = 限界格；向 = 向格；主 = 主格；所 = 所有格；対 = 対格；奪 = 奪格；複 = 複数；与 = 与格。「-」は語幹と接辞の境界を表し、「=」は単語と助詞の境界を表すものとする。

参照文献

- 井上史雄（1984）「埼玉県の方言」『講座方言学 5 関東地方の方言』飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編, 169–202. 国書刊行会.
- 清瀬義三郎則府（1971）「連結子音と連結母音：日本語動詞無活用論」『國語學』86: 42–56.
- 金田一春彦（1942）「関東地方に於けるアクセントの分布」金田一春彦（1977）『日本語方言の研究』217–335, 東京堂出版.
- 佐々木冠（2004）『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版.
- 佐々木冠（2015）「関東地方の与格格助詞ゲの起源に関する一考察」『日本方言研究会第100回研究発表会発表原稿集』77–80.
- 佐々木冠（2021）「不規則性の衰退：日本語方言の動詞形態法で起きていること」『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』木部暢子・林由華・衣畑智秀編, 229–258. 開拓社.
- 佐々木英樹（1997）「総論」平山輝男（編）『千葉県のことば』明治書院.
- 佐々木英樹・W.A. グロースターズ（1984）『千葉県館山市および安房郡言語地図』上智大学大学院言語学研究室.
- 原田伊佐男（2016）『埼玉県東南部方言の記述的研究』くろしお出版.
- 森下喜一（1971）「方言にあらわれる格助詞『げ』について」『野州国文学』7: 21–35.
- 樋口正規（2005）「房州方言の諸相(3)」『ちば — 教育と文化』66: 119–127.
- 日高水穂（2007）『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房.
- 藤原文夫（1972）「千葉県市原市南部方言のアクセントについて」『国学院大学 国語研究』34: 2–34.
- 森田帆南（2020）「千葉県市原市における伝統方言の若年層への継承について：アンケート調査による継承の実態と継承に関わる要因の分析」立命館大学大学院言語教育情報研究科修士論文.

- Harada, Shin'ichi (1973) Center Equi-NP deletion. *Annual Bulletin of Research Institute of Logopedics and Phoniatrics* 7: 113–148.
- Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1951) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge: The MIT Press.
- Kuryłowicz, Jerzy (1949) Le problème du classement des cas. *Biuletyn PTJ* 9: 20–43.
- Malchukov, Andrej (2009) Rare and 'exotic' cases. In: Andrej L. Malchukov and Andrew Spencer (eds.) *The Oxford handbook of case*, 635–651. Oxford: Oxford University Press.
- Onishi, Takuichiro (2012) Gerund in Japanese dialects: Forms and geographical distributions. In *Papers from the First International Conference on Asian Geolinguistics*, 249–260. Aoyama Gakuin University.
- Shibatani, Masayoshi (1973) Semantics of Japanese causativization. *Foundations of Language* 9: 327–373.
- Shibatani, Masayoshi (1977) Grammatical relations and surface cases. *Language* 53: 789–809.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112–171. Canberra: Humanities Press.